

本報告は、18世紀末から19世紀初めにかけて主としてジュネーヴで活躍したピエール・プレヴォ（Pierre Prévost, 1751-1839）の社会経済思想の一端を明らかにし、それをその影響を少なからず受けたと思われるシスモンディ（Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi, 1773-1842）の社会経済思想と対比することによって両者の思想上の近親性を確認し、そこから両者に共通に見られる功利主義的要素を析出することが目的である。ここで「功利主義的」と表現したのは、本報告の課題は功利主義それ自体を論じることが目的ではないからである（ここでいう功利主義とは、せいぜい「最大多数の最大幸福」との表現に端的に示される思想を指している）。

私はかつて、経済学史学会編『経済学史 課題と展望』（九州大学出版会、1992年）や拙著『シスモンディ経済学研究』（三嶺書房、1997年）で、シスモンディの経済学をたんに「過少消費説」と特徴づけることは誤りであることを指摘した。彼の恐慌論の論理は、生産者（資本）間の競争（その結果としての価格競争と過剰生産）という生産・供給の側面と、限定された消費という需要の側面の両面から展開されているのである。（この消費はいわば個人的消費を指している。彼は、社会総体で見た場合に社会の富は固定資本・流動資本・所得＝消費ファンドの三種からなるが、それらは一様に消費に向かっていることがきわめて重要だと注意を促している。個人的消費が最終的には社会の消費水準を決定すると考えているのである。）

その際、「限定された消費」すなわち消費拡大の限定性に関する論理内容を詳細に追っていくと、そこには注目すべき2つの論点が含まれていることについても論じた。そのひとつは、個人の消費はおのずから限定されていて、一定の消費量が満足されればそれ以上の消費は要求しないという点である。これには欲求の問題が関わっている。他のひとつは所得と消費の関係である。富者の場合は所得は多くても消費はそれに対応して増大しない、貧者はその所得額が少なくても消費は相対的に多い、したがって消費・需要量を増大させるためには富者の所得よりも貧者の所得を増大させることが必要であるという主張である。これは所得のより平等な分配の問題に関わってくる。すなわち、シスモンディ恐慌論における一方（需要面）の基軸的論理には、「限定された消費」と欲求の問題が、また社会総体としての所得と消費との関係でより平等な分配という課題が提示されていたのである。

(なお、「欲求の問題」の延長上に、J. ステュアートや A. スミスの著作を最上の経済学書と評価してその普及に努めたヴァンデルモンドの「人為的欲求」論と、シスモンディ経済学における見逃せないもうひとつの論点がある。ヴァンデルモンドの分業論が生産力の上昇という側面からではなくて、市民間の平等の実現との絡みで主張されているからであり、シスモンディが論文「生産と消費の均衡について」のなかで「奢侈品は、これを次から次へと手に入れていくにつれて、その一つひとつから感じる喜びの度合いは減っていく」と主張している点が注目されるからである。しかしこれらの論点は本報告で取り扱う範囲を超えるので、割愛せざるを得ない。)

このようなシスモンディ恐慌論の、その根底にある彼の思想はいかなるものか、その思想の継承発展関係はどのようなものか、—これがシスモンディ研究の次の課題である。もちろん、A. スミス経済学の影響は明白である。それはシスモンディ自身が『経済学新原理』(初版 1819 年、2 版 1827 年)で述べているところである(もともと、第 1 にシスミス経済学がどの程度正確に理解されあるいは取り込まれているか、第 2 に『経済学新原理』におけるシミスとの距離ないし位置関係—これは「転向問題」として指摘される—をどう見るかの問題はあるが)。またリカードウやマカロック、J.-B. セーとの理論的対立もすでに多くの研究が蓄積されている。しかしながらシスモンディの社会経済思想に与えた影響に関しては、これまでになされた研究は少ないといわざるを得ない。

私は拙稿 [2004, 2005, 2006, 2009 等] で、シスモンディと彼の周囲の人々との交流を跡づけ、彼の社会経済思想の淵源を考察した。彼自身の生い立ちから育まれたと思われる点はおくとして、第 1 に彼が青年期にその仲間に加わった、スタール夫人とそのサロンに集った人々、第 2 にジュネーヴ出身でその地にとどまり、あるいはイギリスやフランスで活躍した知識人たち、第 3 にのちに彼の義兄弟となるマッキントッシュをはじめスコットランドやイングランドの同時代人たち、そして 18 世紀末以降ジュネーヴで刊行された雑誌『ビブリオテーク・ブリタニク』(およびその後継誌『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』)や『立法および法学年報』の編集者や寄稿者たち(ピクテ兄弟、ロシュモン、プレヴォ、デュモン、ロッシ等)、—シスモンディの社会経済思想に影響を与えたものとして、これらの人々との交流が注目される。そうだとすればシスモンディを取り巻く知性の連携は、たんに歴史的時系列的にだけでなく、スコットランドやイングランドとヨーロッパ大陸諸国間という空間的地理的広がりのおかげで捉えられなければならないと言える。

そのようなパースペクティブを念頭に置きつつも、本報告ではピエール・プレヴォ(お

よび彼がしばしば論文や翻訳を寄稿した『ビブリオテーク・ブリタニク』誌等)の思想基盤を瞥見したうえで、彼(それ)とシスモンディの思想的連関を考察したい。

シスモンディよりも22歳も年上のピエール・プレヴォは、1751年にジュネーヴで生まれた。若年時代に哲学・物理学・天文学・論理学・神学等幅広く学んだプレヴォは、オランダ・リヨン・パリ・ベルリンで教職や家庭教師、それに教授職を経た後、1796年にジュネーヴで統治機関のひとつである「200人委員会」のメンバーに選出された(彼の生涯と業績に関しては拙稿[2010]参照)。彼の経済思想を知るうえで興味深い著作として、D. ステュアートの *Element of the Philosophy of Human Mind* の翻訳(1808年、ジュネーヴ)、T. R. マルサスの『人口論』の翻訳(1809年、ジュネーヴ)、さらに『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に掲載された論文「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」(QUELQUES REMARQUES suggérées par l'ouvrage de Mr. MALTHUS sur le PRINCIPE DE POPULATION)はじめ、同誌や『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』に寄稿された緒論文等がある。

プレヴォはD. ステュアートに1792年にたった1回しか会っていないにもかかわらず、その後の活発な手紙のやりとりによって両者の関係は親密であったと言われる。プレヴォに翻訳を勧めたのはD. ステュアート自身であった。プレヴォは、自分の講義の一部分の手引き書としてそれを利用しようという意図もあって、一刻も早く翻訳を完成させたいと考えていた。彼はD. ステュアートに「完全に一致」していると認識していたからである。

一方、1809年に出版されたマルサス『人口論』翻訳書に付したプレヴォの訳者序文は短いものである。ここでもプレヴォは、その翻訳を著者マルサスから勧められたと述べている。プレヴォは、マルサスから原著の修正をも許可されていたが、若干の箇所を省略した以外、変更を施さなかった。われわれにとって興味深いことは、プレヴォがイギリスの救貧法に関連する議論と、この議論が議会の救貧委員会によって否決されたこととくに関心を抱き、その部分については割愛しなかったと述べている点である。しかしその意味内容については、そこからはこれ以上分からない。

プレヴォが1816年に発行された『ビブリオテーク・ブリタニク』誌31巻に寄せた「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」と題する比較的長編の論文は、この時期のプレヴォの人口や貧困に関する見解を理解する上で不可欠である。その冒頭で彼はマルサスの考え方を要約して「マルサス氏の人口論の最終的な結論は、貧者の結婚は奨励されるべきではない、ということである。その理由は、人口は生活の糧に依存すると

ということである。というのは、人口はそれ自身、生活の糧よりもはるかに急速に増加する」と述べ、さらに「この理由のすべては以下の2命題に帰される。人口は食糧に依存する。したがってその過剰を予防する必要がある」と付け加え、とりわけあまり主張されない人口過剰の予防策を検討する必要性を主張している。ここでプレヴォは、J.-J. ルソーやミラボーが人口の多さにのみ一国の繁栄（社会や政府の善し悪し）の指標を求めていることを批判し、それはひとつにはもちろん人口であるがそれだけではなく、さらに「幸福」が尺度だと主張している。人口が多ければよいということではなく、人々がどのような生活をしているか、その内容が問題だとプレヴォは考えているのである。

続いてプレヴォはこの論文のなかで、ガルニエとセーについて簡単に好意的に触れたのち、J. スチュアートを肯定的に、やや詳細に論述している。採りあげられている主張は、第1に、あらゆる階級に結婚を勧めることへの批判、子供を養育することができない両親から生まれた子とその親の悲惨な結末に対する警告であり、第2に人口増加は食糧生産の増加に制限されるという点である。そのうえでプレヴォは、J. スチュアートはマルサス人口論に近い主張をしていると評価する。この後プレヴォは、『*Medical and physical Journal*』誌1804年4月号に掲載された（とプレヴォが脚注で示す）「慈善活動家」と署名されたあるジャーナリストに宛てられた手紙のなかで、こともあろうに種痘が好都合というよりも有害であると主張している点を取り上げ、人口抑制を病気による死亡に求める見解に強く反対している。

このようにプレヴォは、すくなくともこの時期にはマルサスの人口論を評価していた。彼が求める人口抑制策は、「力強い、賢明な、徳の高い」解決方法であって、それで人口増加を「抑制するのに十分である」と彼は考えているのである。さらに付け加えておきたいことは、プレヴォの叙述には人々、とくに貧者や労働者の貧困からの回避ないし脱却を目指す視点が随所に見られることである。

1796年に刊行が開始された『ビブリオテーク・ブリタニク』誌（1816年以降は『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌）は、少なくとも当時のジュネーヴの知識人たちに多大な思想的影響を与えたと推測される。この雑誌の編集者はピクテ兄弟とフレデリック＝ギヨーム・モーリスであった。ピエール・プレヴォは編集者ではなかったが、積極的な協力者とされている。彼らが共有する思想は功利主義だった。『ビブリオテーク・ブリタニク』第1号（1796年）序文には、「効用原理はわれわれの不変の羅針盤である」との記述がある。もちろんデュモンも同誌に関わっていたし、『立法および法学年報』（1820-22年）で

はシスモンディとデュモンとともに主要な執筆者であった。

シスモンディに影響を与えた人々に関する概説的な研究を1963年に発表したH. O. パッペは、プレヴォとピクテは「階級対立を国民経済学のもっとも重要な問題として説明する著者だった」と述べている。さらにパッペは「プレヴォとシスモンディは興味を分かち持っていた」と述べて、両者が思想上たがいに近いところに位置していたことを指摘する。しかしこれに続けてパッペは、シスモンディが技術発展によって機械が労働に置き換わることが相対的過剰人口を生み出す原因になっていると考えていることに対して、プレヴォが批判したと指摘している。しかしながら私見によれば、プレヴォの真意は、農業や工業の発展それ自体はよいことである、なぜならばそれはさらなる人口増加の可能性を拡張し、人々が貧困状態に陥ることを避ける道が開けるからであるという点にあるというべきである。そしてその根底にはマルサス人口論に通じる思想があるように思われる。

さらに言えば、シスモンディは生産と富の増加を全面的に否定しているわけではなく、産業の発達にむしろ前向きとも言える叙述もある。彼は、分業は機械の発達とも相まって生産力の上昇をもたらし、諸技術が生産力を高める様々な方法を導き出し、以前よりはるかに多くの製品が製造され、それらにたいする消費需要を増大させたと述べ、生産の拡大にともなって人々の欲求と需要が増大することを認めていたのである。しかしそれとともにシスモンディは、商業の富（資本・生産）が欲求を越えるや、少なくとも下層階級の人民全体に対して貧困と破滅をしか惹き起こさないと主張する。そして彼は、まさにヨーロッパはその状況にあると認識しているのである。パッペが指摘するプレヴォのシスモンディ批判はむしろ枝葉の部分であって、社会経済思想の基盤部分は共通であったと言える。それは、貧困の克服と多数者の愉楽の増大、そしてそれらを実現するための分配の平等を目指す思想である。パッペが指摘するように、プレヴォは、マーセット婦人の『経済学問答』に関連して、「経済学と道徳との間の貴重な接近」に、まだ究明されていない深さ、洗練された分析的透視を必要とする深さが隠れていると見ているのである。

プレヴォやシスモンディをはじめ『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者たちを含めたジュネーヴの知識人たちの思想の根底には、同誌の「不変の羅針盤」としての功利主義が根強く息づいているように思われる。それだけではなく、プレヴォの思想もシスモンディのそれも、単にジュネーヴあるいはスイス・ロマン地方の知性にのみ育まれたものでももちろんなく、スコットランドやイングランド、それにフランスやドイツ・イタリアといった広大な知性の交流が生み出した結晶であるといえよう。

(参考文献)

Pappe, Hellmut Otto, *Sismondis Weggenossen*, 1963.

Prévost, Pierre, QUELQUES REMARQUES suggérées par l'ouvrage de Mr. MALTHUS sur le PRINCIPE DE POPULATION. In *Bibliothèque Britannique, Litterature* vol.31, 1806.

—, *ÉLÉMENTS DE LA PHILOSOPHIE DE L'ESPRIT HUMAIN. Par Dugald STEWART, TRADUIT DE L'ANGLAIS Par Pierre PREVOST.*, 1808.

—, *ESSAI SUR LE PRINCIPE DE POPULATION, OU Exposé des effets passés de l'action de cette cause sur le bonheur du genre humain ; suivi de quelques recherches relatives à l'espérance de guérir ou d'adoucir les maux qu'elle entraîne. Par T. R. Malthus, TRADUIT DE L'ANGLAIS Par Pierre PREVOST.*, 1809.

Simonde de Sismondi, Jean-Charles-Léonard, *Nouveaux principes d'économie politique.*

2 vols, 1<sup>er</sup> éd. 1819, 2<sup>e</sup> éd. 1827. (菅間正朔訳『経済学新原理』世界古典文庫(日本評論社)、1949-50年。斎藤佳倍訳「シスモンディ『生産と消費の均衡について—リカードウ氏の一門弟に反論する—』(平瀬巳之吉編『経済学・歴史と現代』1954年。)

喜多見洋「マルサス人口論のフランス語世界への波及」永井義雄・柳田芳伸編『マルサス人口論の国際的展開—19世紀近代国家への波及—』, 2010年12月。

中宮光隆『シスモンディ経済学研究』1997年。

—, 「シスモンディとリカードウの一接点」熊本県立大学総合管理学会編『新千年紀のパラダイム—アドミニストレーション—』上巻, 2004年。

—, 「J. C. L. シモンド・ド・シスモンディ—恐慌・困窮克服の経済学—」大田一廣編『経済思想6 社会主義と経済学』2005年。

—, 「シスモンディ経済思想とその由来—マッキントッシュ、コンスタン、ピクテ=ドロシュモンを中心に—」飯田・出雲・柳田編著『マルサスと同時代人たち』2006年。

—, 「シスモンディと周囲の人々との交流の一齣」『アドミニストレーション』第15巻3・4合併号。2009年。

—, 「ピエール・プレヴォの生涯と業績」『アドミニストレーション』第16巻3・4合併号。2010年。

—, 「ピエール・プレヴォにおける道徳哲学と経済学」『アドミニストレーション』第17巻3・4合併号。2011年。